

「荻窪の記憶」

こぼればなし

緑のトンネル

神宮外苑のイチヨウ並木をはじめ、神田警察通りのイチヨウ並木やJR東中野駅西口の桜並木など、このところ、東京では次々と街路樹が伐採の危機に脅かされています。しかし、目を欧米に転じると多くの都市で街路樹はのびのびと枝を広げ、「緑の日傘」や「緑のトンネル」の役割を果たしています。

もの知り顔でこんなことをいうのも、「温暖化で熱い路面を20℃に下げ方法・街路樹の研究者に聞く」という長いタイトルの講演会を聞きに行ってきたからです。主催は三鷹市の市民団体、講師は環境植栽学が専門の藤井英二郎氏（千葉大学名誉教授）。欧米の多くの都市で地球温暖化対策として街路樹の「樹冠被覆率」（緑のトンネル度）を増やす取り組みが進んでいますが、日本では過剰な剪定によって、「日傘」にならない「寂しい街路樹」が増えている。藤井先生は、そう警告を鳴らします。

では、杉並区の街路樹の現状はどうでしょうか。阿佐ヶ谷のケヤキ並木を見に行くと、樹冠が道を覆う「緑のトンネル」ができてきたようでした。しかし、青梅街道のイチヨウ並木は、「緑の日傘」には程遠い「寂しい」状態でした。



中杉通りのケヤキ並木



青梅街道のイチヨウ並木

街路樹をめぐりながら、思い出した小説があります。ドイツに住む作家・多和田葉子の短編集『百年の散歩』に入っている「プーシキン並木通り」です。

トレップタワー公園駅で環状線を降りると、熱気と湿り気が一気に引いて、さわやかな外気に包まれた。駅の外に出るとキオスクがあって、男たちがビールを飲んでいて、（略）ところが高架の下をくぐって一人になると大変なことに気づいた。身体が幼児のサイズに縮んでしまっている。（略）あたりには家も郵便ポストも道路標識もなく、プラタナスが道の両脇にどこまでも並んでいるだけだ。その樹木の背丈があまりにも高くて、他に比べるものがないので、自分の背が縮んでしまったように見えただけだ。わたしは不思議の国のアリスではない。

多和田葉子「プーシキン並木通り」より

……いったい、どんな立派なプラタナスなのか、写真を探しましたが見つかりません。そこで、50年前にバルセロナのランブラス通りを撮った16ミリフォルムの1コマを載



ランブラス通りのプラタナス並木

せることにしました。バルセロナには、ガウディの建築をめぐる短編映画をつくろうとして挫折した苦い思い出があるのですが、プラタナスの立派な並木は忘れられません。ちなみに、右側の塔の上に立つ銅像はコロンブスです。